

IV-13

都市地域問題に対する戦略的計画手法の発展経緯と概念的な特徴

広島大学地域経済研究センター 正 員 戸田 常一
 京都大学工学部 正 員 中川 大

1. はじめに

都市や地域に関する問題は複雑であり、単純化したモデル構造や計量的手法のみによってその解決策を導くことは難しいという認識から開発され発展してきたものに戦略的計画手法がある。本研究では、戦略的計画手法が発展してきた経緯とその特徴について、系統的に計画を導くことを目指す方法論との比較をふまえながら考察する。

2. 系統的な計画手法の発達とそれに対する批判

都市地域問題に対する計画手法が一応の成果を示しはじめたのは1940年代後半ごろで、系統的に計画を策定することを重視するという視点の確立が最も重要な動きであると考えられる。この系統的に計画を策定しようという立場は、コーホートサバイバル法による人口予測など、人口や産業立地などの計画策定に必要なデータを、定量的に記述して分析する各種の技法の開発にともなって重視され始めた¹⁾。また、このような動きは、オペレーションズリサーチやそれを体系化して発展したシステムズアナリシスの考え方とも密接に影響しあっており、1960年代には英国においても移入される形で広まった。その代表的な例としては、McLoughlin、Chadwickらがまとめたシステムズアプローチがあげられる²⁾。これらの手法は、対象とする問題に関係するすべての要素をシステムとして体系的に記述し、分析するもので、計画の科学化という面からは高く評価される。とりわけ、計画に対して科学的な見方が未発達であった当時においては、系統的な思考過程そのものが斬新であり画期的であったものと考えられる。

しかし、これらの方法に対しては Hall、Batty らがいくつかの批判的な見解を示している³⁾。その主要な点の第1は、遠い将来を予測して社会的に合意できるような最終的な計画の姿を描くことを大きなねらいとしているが、社会システムを記述してその将来を予測し、何らかの制御によって望ましい方向に導くことは必ずしも容易ではないという点である。また、第2は、現時点で描い

た目標年次の理想像を提示する1回限りの活動として計画をとらえており、計画の更新や継続的なプロセスとして計画をとらえるという考え方に乏しいという点である。これらの2点をまとめると、社会をシステムとして記述し、予測と制御が可能であるという前提のもとに計算技術によって結論を導くことが計画であるという考え方に対する批判であると言える。

3 戦略的な考え方の発達

このように、適切な計画あるいは合意の得られる計画を、多くの主体や価値観に対して中立的な立場をとって、客観的に導くことを目指すという考え方は、最終的な計画策定の段階で相異なる主体や価値観に対して客観的な重要度を設定するということを意味し、その仮定に対する批判から、特にまず米国において新しい考え方が示された。それは、Davidoffによるアドボカシープランニングなどに代表される⁴⁾。これらの考え方は、計画の目的は異なるグループ間で対立するものであり、また、計画を実施したことによって各グループの目的がどの程度達成できるかを長期的に予測することも困難であると考えて、計画は客観的な事実を探究することではなく、政策の選択の問題として捕らえるべきであるとするものである。

一方、このような動きと並行して、より問題解決に直結した計画をなすべきであるという立場に基づく主張がなされはじめた。その代表的な動きの一つは、米国において、企業の意味決定論として1960年代ごろから発展した企業戦略論を公共計画に適用しようというもので、いま1つは、英国において発達した戦略的選択アプローチである⁵⁾。後者は、Friendらが実際の計画策定に参画する中で、システムの思考過程が必ずしも万全な結果をもたらさないということを見出し、より現実に近い意思決定過程として、不確実性に対応した漸進的な決定方法を導いたものである。英国におけるこのような戦略的な計画の考え方は、もともとはオペレーションズリサーチの研究グループに

よって開発されてきたことにもみられるように、数理的な計画手法を批判してきたものではなく、これらの手法を実際に適用する際に生じてきた問題点への対応を検討する中から形成されてきたととらえるべきであると考ええる。

4. 戦略的計画方法論の特徴

これまでの系統的かつ客観的な計画策定を目指すアプローチに共通する重要な特徴としては、一定の系統的手順に基づけば所与の目標に照らして好ましい解が得られると考えていることと、将来のある目標年次を定めて、その時点におけるさまざまな状態を予測・推測し、それに基づいてその時点で描くことのできる理想像としてのマスタープランの作成を目指していることがあげられる。

一方、戦略的なアプローチは、計画を取り巻く社会・経済の情勢はもちろん、それを評価する人々の価値観や考え方も絶えず変化しており、このような不確実な状況においては、系統的な手順によっては納得できる計画策定が可能であるとは限らないと考えるものである。従って、系統的な過程によって計画が得られるという前提に立つのは適切ではなく、当面の行動をいかに決定すべきかという戦略をアウトプットと考えている。図1は、Suttonによる戦略的な計画の概念を示したものである。この図より、循環的な計画過程を想定していることがわかる。

5. おわりに

戦略的な計画方法論の発展経緯を振り返ると、

このような考え方が比較的以前から示されていたことがわかるが、実際の計画策定に用いられることは多くなかった。しかし、現在の複雑化した計画環境の下では理想的な計画を描くだけでなく、より現実的な実行可能性の高い計画も求められており、今後戦略的な計画策定の考え方の重要性もより大きくなるものと考えられる。

(参考文献)

- 1) Batey, P.W.J. and Breheny M.J.: Methods in Strategic Planning, Town Planning Review, vol. 49, No3, July 1978, pp. 259-273
- 2) McLoughlin, J.B.: URBAN AND REGIONAL PLANNING A Systems Approach, Faber Paperbacks, Faber & Faber, 1969
- 3) 戸田常一: 都市地域計画におけるシステムズ・アプローチの展開-英国の計画事情を例として-土木計画学研究・講演集No7, pp157~162, 1985
- 4) Davidoff, P.: Advocacy and Pluralism in Planning, Journal of American Institute of Planners, 31, 1965
- 5) 中川大: 交通施設の計画過程とその方法論に関する研究、京都大学学位論文、p8~9、1989
- 6) Sutton, A., Hickling, A. and Friend, J.K.: The Analysis of Policy Operations in Structure Plan Preparation: The Strategic Choice Approach, IOR Internal Paper IOR/903, COOR, England, 1977

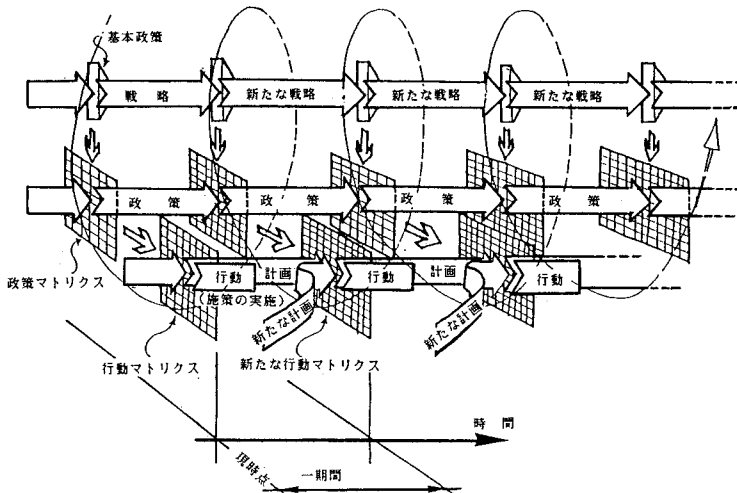


図1 Suttonによる戦略的な計画の概念(文献6)より翻訳のうえ転載)